

神 釋 亞 呷 厨 御



し
う
や
り
ふ
か
ふ

或る日曜日のことである。天気も良いので土蔵の式階に入り、蔵書などを革めて点検し、いく冊かは虫干しにしようぞなどと思い至った。いく筋かの差し込む陽射しに照らされ、埃のきらきらする中、汗をかきつ、作業する内、その冊子が眼に留まる。和綴じの古いものであった。手にする。指に馴染む、歳経りし品であった。古いとは言っても、江戸の徳川將軍家に実権と勢いのあった時代、寛永年間のものである。一葉、二葉と捲る内に、私は読み耽ってしまった。眞神の創世記を知ってはいたが、しみじみ原文（とは言え、この寛永版は所謂書き下し文である。眞の眞なる原文は眞神文字であるが、その時代時代で、その土地で通用する文字を取り入れているため、こういうことが起こるのである。ヒエログリフや楔形文字やサンスクリットや漢字などの版もある）で読んだことがなかったからである。『眞神史』太極究竟原初篇、左のとおり。

神カミ亞イ呬アレ厨サ御ミ 時空なき御世より坐す。

却説、時空の熾るまへ、それはまへならず、すなはち時なりせば、いつ熾りたるかをいへるものかは。

三千億兆超ゆ無際限数ありし大宇宙世界群の生じたる時点は斯くして知られざる也。過去ともいへ、現今ともいへる也。未来ともいふ。亦その大きな巨微太細を問へども、空隙なくば大小太細厚薄なし。いやさ、様態及び形状もなし。有無すら及ばず。畢竟無にすらも非ず。有にすらもあり。奈何せむとも一切思惟考概の及ぶに非ず。

されば今此處、是宇宙開闢ならざるや。思ひ煩へども、とてもかくても。

由縁もありやうなし。なかりけるものかは。

その時あり得ず。その處あり得ず。そのいはれ要らず。只唯只管唐突に在らずや。

大炎裂之天帝御神は燃ゆる火の神也。彝亞呬厨御神、彼の神を在らしめ、時空を生ぜしむ。

次に彝秋羅婁神、一切万象なる神也。彝亞呬厨御神、彼の神を在らしめ、一切万象と成る。

二柱の神は彝亞呬厨御神と差異なし。しかれども一体又は同じともいはず。様態及び形状なし。違ふも異するもなかりせば。これぞ時空万象のいはれ、ありとしあるもの、なしとしなきもの一切。

(中略)

神彝亞呬厨御より玖阡玖佰玖拾玖兆代の裔、大偉なる王生誕す。彝玖邇之王と伝ふ。是眞神の玖邇の初め也。

奥付を見るに、寛永肆（４）年丁卯、甲辰清明、虹始見、万物発而清淨明潔可知草名之候、とあり、皇紀貳千貳佰捌拾漆（２２８７）年、明國天啓漆（７）年と記載がある。西暦で言うならば１６２７年に当たる。

思えば、この数年後、前田家の寛永の危機を発端に、眞神にまで飛び火する大事件が起こった。本朝（このときは、徳川幕府）との緊張感が高まりつつあった時節であり、そんな危機意識からだろうか、純粹なる自国の史書が刷られ、綴じられたのである。自らの国の高い意義を再確認し、士気を高揚させ、併せて、神の崇高なる偉業を讃え、その加護に与かろうというところか。実際、詩文にはただ典雅を愉しむのみならず、実用に資する途があった。たとえば、景観の良いところには、必ず神がいて、人には思ひ計れぬ神慮によって、いかなる運命を与えられてしまうかしれぬものであるから、人は歌に詠み、荒御魂を柔し、慰め、讃えるのである。柿本人麻呂が道殢（行き倒れの餓死者）を歌に詠むのは、同情からでも憐れみからでもない、怨霊とならないように悼んで慰撫するという呪術的な意味があったのである。また平家物語成立の由縁も同様ではないか。文学には古来、実用の用があったのである。

さればこの史書も同じく実用の用として刷られ、綴じられたのであろう。人の思惑とは、いつも同じような道筋を辿るもの、などと想いながら、再び和綴じ本を見遣る。それでも侘びた褻れ傷みがあり、昏い庫蔵にあつてさえも日焼けし、味わい深さがあつた。眞神壹萬年の歴史に比すれば、この寛永本など、到底、いにしへなどと言える文献ではないが、星霜の幾度かを問わず、存在（＝諸々考概、万々象一切）というは未遂不収。無言で、じつとしているとても、どんな思惟よりも深く高く、言葉よりも意味多く精妙甚深で、直截である。そこに経緯（いわれ、理由、根拠、原因）はなく、唐突であり、時空を絶したものに由来し、いや、時空を絶したもののそのものであつて、韋荳異叛などのあり得ようはずもなく、様態及び形状なく、自らに拠りて在るか自由さで、奔放で、捉え方がなく、次の句も継げず、あんぐり。厭でも、他にどんな現実もない。ただ蟻や路傍の草のように虚しく死んで逝くしかない。受け容れられようものか。

仕方なく気休めに、真兮くんの似顔絵を掲げて置く。人間はこんなことしかできない。うーん、余り似てないなあ。何もかも途中、半端、宙ぶらりん！

同

